

温泉文学としての『ジンプリチシムス』

吉 田 孝 夫

悪魔は、魂をわがものとし／荒々しくも勝ちほこり

風呂から風呂へ、身を切る冷泉から／煮えたぎる熱湯へと連れてゆく。

S・ブランド『阿呆船』八五¹

このようにして、神はこの愛の唯一の戒めに多様性を与え、われわれを唯一の必要なものに常に導くこの多様性によって、多様性を求めるわれわれの好奇心を満足させてくださるのである。

パスカル『パンセ』六七〇²

一 霊泉

地より湧き出た泉に浸かるとき、人は現世にありながら、それを超えた世界へと微かに接触するようである。「肉体と精神、形而下的な身体と形而上の靈魂とが融合する場所³」——、幸田露伴や川端康成ら、幾多の近代日本文学者たちが求めた温泉は、まさにそのようなものとして特徴づけられると川村湊は言う。

1 Nach: Lutz Röhrich: Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten. Bd. I. Freiburg/Basel/ Wien 1994, S. 130. (Artikel "Bad, baden") 現代思潮新社刊の尾崎盛景訳（一九六八、二〇〇二年）『阿呆船 下』一二四頁に、この〈地獄の温泉〉のニュアンスは訳出されていない。
2 世界の名著二四『パスカル』前田陽一責任編集、一九九五年、中央公論社、三三二頁。

グリムのメルヘン集五〇番「いばら姫」では、子どものない王妃が泉で水浴しているところに一匹の「蛙」が現われ、娘の誕生を予言する⁴。この伝承における泉は、「彼岸世界に存在する者たちと遭遇する場所⁵」として解することが可能なようだが、そうした観念は、キリスト教の古い宗教説話（*exempla*）にも顕著に見える。古代末期に書かれたグレゴリウス大教皇の『対話篇』（六世紀末）は、後のヨーロッパに広く流布して、中世の煉獄観を準備する先駆的な著作となったもののだが、その第四巻に、二つの特筆すべき物語がある。それらは共に、死者が生前の罪を償う場所として、現世のとある領域を指定しており、それがほかならぬ温泉、湯治場なのであった。ル・ゴッフは、グレゴリウス大教皇の「天才的なひらめき」を称賛する。

このローマの貴族は、今なお命脈を保つローマ文明にとって最も枢要な建造物の一つ、古来の、すぐれて衛生と社交の場たる施設を選んでゐる。その上、このキリスト教最高指導者が選んだ場所は、温水治療と冷水治療の交代という点で、キリスト教もその遺産を継承している極く古い諸宗教以来の、浄罪の場所のあの構造にちょうど呼応している。要するに超自然と日常性のこの混合、あの世の発散物のような湯煙が立ち、亡霊が湯男を務めるその中に、ある偉大な想像力の資質がはっきりとうかがえるのだ⁶。

湯男となって働きながら、生前の罪を雪ごうとする亡霊たち。その奉仕を受けた生者によって、死者に施しと霊的な助力が与えられることが、これらの物語の読者たちに求められている。古代において「社交や閑暇（otium）を過ごすための場所」であった浴場が、そこに「立ち込める熱い蒸気と水のおかげで、死やあの世に関するキリスト教的イマジネールにいまだ活力を注ぎこんでいた⁷」ことが、この古代末期・中世の宗教説話から知られる。

本論は、一七世紀ドイツの大衆小説『ジンプリチシムス』（一六六八／一六六九年）を、この霊的なニュアンスを伴った温泉の表象のもとに読み解こうとするものである。

近代ドイツ文学を温泉の観点から考えるとき、カールスバートやマリーエンバートといった温泉保養地に深い関わりをもって文学的創作をしたゲーテと、『カッテンベルガー博士の温泉旅行』（一八〇九年）のジャン・パウ、そしてこの愛読書を片手に療養施設に入ったヘッセの『湯治客』（一九二五年）が思い浮かぶ。また『もじゃもじゃペーター』の作者H・ホフマンは、温泉効能書パンフレットのパロディ的作品『ザルツロツホの湯治場』（一八六〇年）を書いているし、E・T・A・ホフマンの代表作『黄金の壺』（一八一四／一八一九年）には、冒頭の重要な舞台として「リンケ温泉園」が登場する。⁸ この『黄金の壺』におけるような、作品の中心ではない点景的なものを含めるなら、古来よりヨーロッパの聖俗両面における文化的焦点となってきた〈温泉〉トポスへの言及は、枚挙にいとまがないことになるだ

3 川村湊『温泉文学論』、新潮新書、二〇〇七年、七頁。

4 『完訳グリム童話集1』 池田香代子訳、講談社文芸文庫、二〇〇八年、四五六頁。

5 Josef Kinna: Kurt Ranke: Artikel "Bad, Baden". In: EMI (1977), Sp.1137-1141. Hier Sp.1140. マリー・ハッセンブフルークの口承物語に、グリム兄弟が少なからぬ加工を施したこのメルヘンは、その初版においても、泉における予言のくだりが存在するが、それは「蛙」ではなく「ザリガニ」によって行われる。ちなみに一七世紀イタリアにおけるバジレの類話「日と月とタリリア」には、そもそも親の不妊のくだりがなく、一八世紀フランスのペローの類話「眠れる森の美女」では、王と王妃が効験を求めて「国中のあちこちの湯治場」へ行っただとあるが、甲斐なく終わる。『初版グリム童話集2』吉原高志・吉原素子訳、白水社、二〇〇七年、一五四頁、ジャン・バティスト・バジレ『ペンタメローネ（五日物語）』杉山洋子・三宅忠明訳、大修館書店、一九九五年、四二二頁、『完訳ペロー童話集』新倉明子訳、岩波文庫、二〇〇四年、一五八頁を参照。民話学者ルドルフ・シュタハ、このグリム・メルヘン五〇番について、『バジレ／ペロー／グリムという伝承の変遷の跡を伝え、そしてとりわけ、それぞれの時代の社会的・道徳的・文学的環境へとメルヘンの素材が加工され取りこまれてゆく姿の諸傾向を示してくれる最も雄弁な例の一つ』だと評している。Nach: Hans-Jörg Uther: Handbuch zu den "Kinder- und Hausmärchen" der Brüder Grimm. Entstehung-Entstehung-Wirkung-Interpretation. 2., vollständig überarbeitete Auflage. Berlin/ Boston 2013, S.115.

6 ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』渡辺香根夫・内田洋訳、法政大学出版局、二〇〇三年、一四〇―一四二頁。

7 ジャン・クロード・ジュミット『中世の幽霊 西欧社会における生者と死者』小林宣子訳、みすず書房、二〇一〇年、四四頁。

8 ホフマン『黄金の壺／マドモワゼル・ド・スキュデリ』大島かおり訳、光文社古典新訳文庫、二〇〇九年、一一頁。なお、この部分の訳語を批判し、これを日本語でふつうに想像する「温泉」とは別のものであると主張する論考として、以下の二点がある。識名章喜『ドレステンに「温泉」はあったのか？』E・T・A・ホフマン『黄金の壺』の「リンケ温泉」について――、『慶應義塾大学日吉紀要』同「入浴観の違いから生じる誤解――E・T・A・ホフマン『黄金の壺』の「リンケ温泉」について――』、『慶應義塾大学日吉紀要』ドイツ語学・文学』四八（二〇一一年）、九一―一二九頁所収。時にきわめて辛辣な批判のすべてに首肯することは難しく、また中世から近世にかけての温泉の盛衰に関する歴史的叙述に曖昧な点が残る（例えば後者の九一―九二、九五―九六頁）が、少なくとも温泉に関わる文献情報は有用である。

ろう。

ところで近代の前夜、一六世紀のドイツ文学においては、諷刺文学と〈温泉〉トポスとの緊密な関係が存在したことが知られている。代表格はH・ザックスであり、グリーンメルスハウゼンはこのニュルンベルクの職匠詩人を愛読したようであるが、ザックスの他にも、ムルナー、フィッシャルト、そして宗教改革以後の教派間の論争的文書や幾多の民衆向け瓦版に、盛んに〈温泉〉表象が観察される。これは市内の浴場ではない、野外の温泉・鉱泉の医療的価値が再発見され、その利用と研究が進んだのがまさにこの一六世紀であった史的状况と無関係ではないだろう。

同じく近代の前夜、一七世紀に書かれた『ジンプリチシムス』は、文学作品における温泉言及の例として、例えばクリチエクの『世界温泉文化史』などにも紹介されている。ただしそれは、鉱泉の商業的利用による「保養地の建設への関心」が表現されていること、また三十年戦争期に、温泉地が「野戦病院」的な機能を果たしたことがわかるという、いわば温泉の歴史・経済的実態に関わる史的資料としてにすぎない。¹⁰

P・ヘルマンによる、グリーンメルスハウゼンと〈温泉〉の関わりそのものを主題にした先行研究（二〇〇三年）がある。一七世紀ドイツ南西部の複数の温泉場における社会史的状况を詳細に伝える実に有用なものである。ここで〈温泉〉は、小説の「構造的¹¹中心」を成すものであり、複数の物語の糸が寄り集まる「結節点¹²」だと言われる。たしかに養父との再会やムンメル湖探検の開始といった重要な出来事が、まさに〈温泉〉を舞台として生じる。また〈温泉〉は、社交と怠惰、感覚の喜びと性、盗みと詐欺といった「俗世の凝縮された空間¹³」を表わすとも、ヘルマンは述べている。本論もまた、このヘルマンと同じく、一七世紀ドイツのベストセラーとなったこの『ジンプリチシムス』において、〈温泉〉という舞台が、作品の根幹に関わる意味を担っていると考ええる。ただし「構造的¹¹中心」だと言うヘルマンの分析は、単に筋書き上のいくつかの糸が終結しまた分散していくという、形式的な面を指摘したにすぎず、また〈温泉〉が世俗性のみを体现しているという彼の見解には、本論はおよそ首肯することができない。

というのもこの小説は、冒頭から結びまで、さまざまな〈病〉の表象に貫かれており、その意味で、小説の結びに向

かつて頻度を増しつつ現われる〈温泉〉のトポスは、あたかもその〈病〉への対応と治癒を目的として置かれているかのようなのである。世のさまざまな〈病〉を列挙し、揶揄し、そして自らもそれに感染した後、最終的に主人公は〈温泉〉へと逢着する。そしてその〈病〉は、単に世俗的享楽からの梅毒感染というようなことだけでなく、精神的かつ霊的な地平にも、同時にきわめて深く関わっている。

〈病〉のレビューから、〈温泉〉による治癒の試みへと展開する小説。この仮説のもとに『ジンプリチシムス』を読むとき、従来の研究が注目してきたいくつかの重要な論点が、すべてこの〈温泉〉のトポスとのあいだに求心的・遠心的な緊張関係を作りあげていることがわかる。具体的には、近世特有の終末観と民衆ユートピアへの待望、アウグスティヌス・カトリック的な信心文学 (Erbaungsliteratur) としての性格、ピカロ風の主人公による社会風刺的文学としての性格、そして第五巻の「ムンメル湖」、地下水底探索の場面が典型的に示している、同時代の博識学者A・キルヒャーの思想にも通ずる近世的自然観などである。これらの論点と〈温泉〉トポスが、作品全体の構成においてどのような相互性のもとに織りこまれていくのか、そして主人公の身体的な癒しと霊的な救済が、〈温泉〉トポスのもとにどのように叙述されているのか。以下、本論はそれを素描してゆきたい。

二 保養地と悪魔

『ジンプリチシムス』第二巻第二章は、「いつ入浴する (baden) のが優れて適切であるか」(W123)¹⁴ という表題をも

9 Simone Loele: Wahrheit, Lüge, Fiktion. Das Bad in der deutschsprachigen Literatur des 16. Jahrhunderts. Bielefeld 2008, S.10f., 255 und 295.

10 ウラデーミール・クリチェク『世界温泉文化史』種村季弘・高木万里子訳、国文社、一九九四年、二二七、三三三頁。

11 Peter Heidegmann: "Es gung so Kurraschy her!": Die Literarisierung der Griesbacher und Peterstaler Sauerbrunnen bei Moscherosch und Grimmelshausen. In: *Simpliciana* 25(2003), S.187-220. Hier S.208.

12 Ibid., S.190.

13 Ibid., S.192. Vgl. auch S.207.

14 Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen: *Der abenteuerliche Simplicissimus Teutsch*. In: ders.: *Werke* I-1. Hrsg. von Dieter Breuer. Bibliothek deutscher Klassiker. Frankfurt am Main 1989. (Zwei Bände: 1. Band: S.1-111, 2. Band: S.112-220) S.123.

つ。〈温泉〉に関わる作中最初の言及はおそらくここかと思われるが、しかしここでは単に、糞便にまみれた主人公を描く笑話的内容において、彼がすぐにも身をきれいにしたいということが述べてあるにすぎない。ただしここには、「暦 (Kalender)」に「書かれていようとも」(W123)、今すぐに入浴すべきだという表現が見える。農事と日常生活に関わる実用的な知恵を満載し、そこに娯楽的要素を加えた「暦」の書は、近世の大衆向け冊子として広く流布していたが、そこには生活便覧として入浴に適する季節も記されていた。グリーンメルスハウゼンは、ちなみにこの分野においても重要な著作を残しており、¹⁵一九世紀のヘーベル、二〇世紀のブレヒトへの系譜を形づくる代表的な「暦」作家である。さて〈温泉〉のトボスは、一六六八年の『ジンプリチシムス』初版における最終巻であった第五巻と、その翌年に好評を受けて出された「続篇」(Continuatio)——すなわち岩波文庫その他の邦訳に言われる「第六巻」——との二つの巻に集中的に現われる。つまり〈温泉〉は、作品の結びに近づいて登場するわけである。具体的には、スイス・アールガウ州の温泉保養地バーデンと、シュヴァルツ・ヴァルト(いわゆる「黒い森」)の山中にあるグリースバッハ村の湯治場であり、両者ともに、二一世紀の現在もなお有名な保養地として存続している。

この〈温泉〉表象を前景化してゆく第五巻は、きわめて宗教的な始まりをもつ。親友ヘルツブルグダーとともに、巡礼地アインジードルンへと向かい、そこで主人公は正式にカトリック教会への入信をする。温泉地バーデンは、その聖なる儀礼からそのまま続く物語の舞台となるのだが、そこにはどんな意味が見出せるだろうか。ピカレスク的小説の主人公ゆえに、彼の信仰の決意はおよそ素直なものではなく、つねに自他への欺瞞を含んでいる。

何はともあれ、まずこの第五巻冒頭における宗教性が、第四巻に濃厚な世俗性に対し、きわめて明白なコントラストを形成することを確認しておくべきである。第四巻は、パリでの放蕩と快楽、その果ての梅毒への罹患と所持金の喪失、続いてマスケット銃兵への逆戻りと、手あたり次第に略奪する落伍兵の集合体である「メローデ兄弟団」への転落、そして悪漢オリヴィエとの思わぬ再会と、盗賊の輩へのさらなる転落という展開をたどってきた。主人公が身を寄せた「メローデ兄弟団」は、露骨に「ジプシーに比すべき」(W398)人間たちだと称される、市民でも兵士でもない、社会

の末端にある人びとの集まりである。¹⁷ またオリヴィエは、一七世紀において権謀術数の積極的容認の思想と理解されたマキャヴェリズムを、心底から信奉する暴虐な男であった。

世俗の泥を一身にかぶってゆくような第四巻の展開は、オリヴィエと好対照を成す善良な人物ヘルツブルダーとの再会(二五・二六章)によって締めくくられる。これは第五巻の聖なる世界への橋渡しとなるものだろう。あてどのない迷走を物語の旨とするピカレスク小説は、つねに次なる変容への暗示をして当座の語りを終えるかのである。

こうして第五巻は、先に述べたように、この親友との巡礼の旅で始まる。堅いえんどう豆を靴に入れて歩くというヘルツブルダーの徹底ぶりに対して、しかしジンプリチシムスのほうは、こっそりそれを煮て柔らかくしたり(W450)、「嘘」(W448)の告解をしたりと、実に頼りない。とはいえここで特筆すべきは、この旅の途上で見たスイスの「平和」の情景、「地上の楽園」(ein irdisch Paradies) (W449)と主人公には感じられた、豊かで安全な国の描写である。通常どこかに皮肉を潜ませる厄介な語り手が、この一七世紀スイスの描写においては、無条件の讚美を贈っているように見える。このような語りは、実はしばらくの間を置いてもう一度、第五巻第十九章における「ハンガリーの再洗礼派」集団の描写で繰り返される。カトリック教会からすれば「異端者」(W526)に違いないこの再洗礼派の集団生活が、「修道院の生活よりもすぐれている」(同)などと、教会を挑発する危険な言い方で称賛される。

語り手は、第五巻冒頭とこの第十九章を結びつける明白な意図をもっていたように思われる。というのも冒頭第二章には、巡礼地で行われる悪魔祓いの儀式を見物する場面があり、ここで「異端」と「再洗礼派」の語がそろって現われ

15 Grimmelhansen: Des Abenteuerlichen Simplicitissimi Ewig-währender Calendar. Faksimile-Druck der Erstausgabe Nürnberg 1671. Mit einem erklärenden Beihft. hrsg. von Klaus Habekamm. Konstanz 1967.

16 望月訳がこの人物名を「オリバー」としている理由は不明である。「メロデー」は「マロード」と記されているが、これは落伍兵の集団名が、スウェーデン軍大佐フォン・メロデーの名前と、「軍から落伍して略奪をはたらく」(manodieren)の言語遊戯的な混合から生まれているので問題はない。Vgl. Breuer: Stellenkommentar. In: W924.

17 ただしこの社会的落伍者たちへの語り手の視線には、否定的な、もしくは軽蔑的な色彩はなく、むしろその逆のものを感ぜさせる。ヘルツブルダーは、彼らの手で生死の危機から救われる。Vgl. W443.

て、二つの箇所の対応関係を暗示するからである。信心からというよりはむしろ「好奇心」(Fürwitz) (W451) に促されて傍に立っていると、主人公に向かって、悪魔が突然に悪態をつき始める。おまえは悪魔よりもたちの悪い「嘘つき」であり、「異端の輩に属して」(W452) いるのだと。そしてジンプリチシムスの親については、「カルヴァン派というより再洗礼派だった」と言い放つ¹⁸。主人公の実の父は、第一巻で描かれていたように、森の隠者として世俗との関わりを完全に断ち切った、聖なる祈りの暮らしを続け、その果てに森で死んだ。つまりここでの悪魔は、欺瞞者としての因襲的イメージとは逆に、冷徹な真理を告げ知らせる役割を担うようである。つまり悪魔の仮面の背後に、神の慧眼が隠れている。主人公は、この時点ではまだ、あの森の隠者が自分の父であったことを知らないのだが、少なくとも自身自身の乱れた人生を指弾されて、心底から動揺する。そしてこの後、カトリック教会への入信をするのである。

スイスとハンガリー再洗礼派との並行関係は、小説のそもそもの冒頭から要所ごとに提示されてきたユートピア探求の主題を思い起こさせる。第三巻、すなわち全五巻の作品の中心部において、狂人「ジュピター」が物語った新しいドイツ像などはその最も重要な場面の一つである。しかしここでは、まず第一巻第一章における小説『ジンプリチシムス』の冒頭を確認しておかねばならない。第一巻第一章は、ある楽園のイメージを追いかけており、しかもそれは、世の終わりの観念と表裏一体に行われていた。

いま、このわたしたちの時代に——みなは、それがやがて滅びゆく最後の時代だと信じているが——、ちまたの人のびとのあいだで、とある病がはびこりだしている。(W17)

作品のそもそもの書き出しであるこの文章は、近世ドイツの終末感情と、そして終末の時代に蔓延する一つの病気存在を知らせている。その「病」とは、素性あやしく、身分の低い無数の者たちが、一旦、財を成して、最新流行の衣装を身にまとうことも可能になると、その途端に自分は「太古の家系に連なる騎士のお倅方や貴族の名士」(W17) な

のだと思ひこむ病氣であるという。

虚飾と虚栄を求めるこの時代に対して、しかし自分は育ての両親とともに、深い森に包まれて素朴な農民の暮らしをしている。こうして描かれるのは、都市的で高雅な貴族の世界とは対照的な、みすばらしく簡素な屋敷とまわりの森の情景である。そしてこの描写が、森に立つ柏の木に言及するとき、「これはとても役に立つ高貴な樹木であって、その枝には焼きソーセージや油のしたたるハムがたくさん実り、すっかり大人の樹に成熟するまでには百年かかる」(W18)と言われる。初期資本主義の時代に突入した近世に、促成の成金貴族が群れを成して生ずるなかで、それとは対照的に「百年」もの長い時間をかけて育つという柏の木。そしてソーセージやハムがその木に実るといイメージには、例えば一六世紀のブリュッゲルが絵画化したような、民衆的ユートピアとしての「のらくら者の国」(Schlaraffenland)の觀念が生きている¹⁹。さらにこれに続く箇所では、エデンの楽園時代を想起しながら、それが「医薬」(Medizin) (W20)に心を煩わせる必要のない時代であったという説明が殊更に置かれる。三十年戦争の最中に、一場の夢のように存在したこの楽園的生活は、この後まもなく第三章において、森を徘徊する兵士たちによって滅ばし尽くされる定めにある。〈病〉が支配する時代では、楽園の実現は不可能なのだろうか。『ジンプリチシムス』を一貫するユートピア探究の精神は、この「のらくら者の国」の冒頭から、遠く第五巻のスイスと再洗礼派集団の描写へと繋がっている。それはも

18 Breuer は、ジンプリチシムスのカトリック的信仰にジャンセニズムへの近さを見る。人間の底知れぬ罪深さを強調するジャンセニズムは、カトリック教会からカルヴィニズムとの親縁性を批判されている。Breuer: W943.

19 Vgl. Breuer, S.797. 「その實は乾ソーセージや脂っぽいハムの材料である豚の飼料になる」という望月市恵訳は誤りである。「樫といえは太したもの、だいいち豚肉を刺してジリジリと焼く串が樫の枝ですが、その枝のついでている元の樹ですぞ」という関口存男訳も誤りである。「これは腸詰肉や脂ぎったハムが生りさがるという重宝な銘木で」という上村清延訳(抄訳版)が正しい。蛇足ながら、「Yahoo! 知恵袋」に掲載された当該箇所に関する質問への回答も間違っている。樹木に食べ物が実ると上村訳にあるのは、単なる直訳であって意味が通じない、と質問者は書いているが、そのイメージの背景にある民衆の觀念が重要である。グリーンメルスハウゼン『阿呆物語 上』望月市恵訳、岩波文庫、一九八六年、三三頁、グリーンメルスハウゼン『阿呆物語 上巻』関口存男生誕百周年記念著作集、翻訳・創作篇2、三修社、一九九四年、一四頁。グリーンメルスハウゼン『阿呆物語——シンプリチシムスの教奇な生涯——』上村清延訳、『世界文学全集 古典篇』第四巻、河出書房、一九五一年、二一九—三〇二頁所収、三二二頁。Yahoo! 知恵袋：2016/08/04 検索 (http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1184902541)

ちろん、後の続篇における『ロビンソン』小説的な絶海の孤島の描写にも続くものであるのだが、ともあれ今は〈温泉〉表象の検討を続けよう。

ジンプリチウス自身も認識するように、「好奇心もまた病である」(W340)。つまりアウグスティヌスの『告白』²⁰にも典型的に述べられたように、世俗世界への好奇心は、神と信仰への専念から気を逸らせる大きな悪徳である。

この意味で、主人公のカトリック入信は、実はきわめて不完全なものであった。つまりその改心は悪魔に告げられた罪と罰への恐怖から成されたのであって、「神への愛」(W453)からではない。そして結局、主人公は「見物に値する」(W453)教会の宝物をいろいろと眺めた末に、「冬を越す」ための暖かい場所を求めて温泉地へと向かう。

先述のバーデンの温泉が登場するのは、まさにここである。第四巻までの長きにわたる世俗世界の放浪と、そして第五巻はじめにおける宗教的放浪、すなわちアインジードルン巡礼を経て、しかし主人公は、俗世への好奇心と真実の信仰とはさまに、なおも迷走を続けている。あの祈祷場面での悪魔の宣告は、実に正しいものだったと言うべきだろう。そして湯治場は、この病んだままの主人公を受けとめる場所となる。巡礼地の教会にあってさえも不治であった彼の〈病〉は、ここで快癒するのだろうか。

来てみれば、しかしこの温泉地は俗世のあらゆる要素が凝縮されたような場所であった。中世の宗教説話に語られたような霊との接触の気配などない。ここにあるのは、大勢の金持ちのスイス人と、カネにものを言わせた享楽ばかりであった。先のユートピアとしてのスイスのイメージは、ここで激しく相対化される。そして何より、主人公のジンプリチシムスは、「長く厳しい冬」(W454)を忘れて、この場所で快適な暮らしをすることしか頭になかった。

この時ジンプリチシムスは、莫大なカネを所有していた。第四巻末尾でオリヴィエが殺された時、彼の残した大金を持ち出してきていたのである。ジンプリチシムスとしては、特にそれを悪用する意図もなく、親友ヘルツブルダーにすべてを広げて見せたうえ、自由に使ってほしいと頼む。それに対してヘルツブルダーは、「不実な満ちあふれた」(W455)この世で、このような友人の信頼を示されたことに心から感激する。バーデンの湯治場では、少なくとも「友

情」(W455)の確認は果たされたようである。

とはいえこのスイスの湯治場は、主人公の〈病〉を直す場所とはならない。二人の友人同士は、この後バーデンの町を去り、重要な軍議のためにウィーンへと向かう。交渉は上首尾に進み、ジンプリチシムスも、皇帝の住まう都で「貴顕の身分への階段をかけあがるチャンス」(W457)にたびたび恵まれるのだった。しかしジンプリチシムス、つまり「最高級の阿呆」という名前をもつ彼は、自らの「愚かさ」(fatuitas)と「運命」(fatum)の導きのまま、結局はその好機を逃してしまふ。

そのうちに友人ヘルツブルダーは、戦場で重傷を負い、さらにこれとは別に、手足が麻痺する症状に襲われた。そして通常の彼からは想像もできないことだが、「胆汁(die Galle)に苛まれる胆汁質の人間(Cholelicus)」(W460)のような怒りっぽい性格に変わってしまう。ここで医者から勧められたのは、シュヴァルツヴァルトのグリースバッハへの湯治であった。ジンプリチシムスは、ウィーンでの自分の「幸運を捨て置き」(W460)、歩行の不自由な友人に付き添って、ドイツの湯治場へと旅してゆく。

三 表層と地底

ドイツ南西部の湯治場グリースバッハは、Sauerbrunnenの泉質で名高い。

このドイツ語について望月市恵訳(一九五四年)と関口存男訳(一九四九年)は、相そろって「炭酸泉」²¹の訳語を与えている。巷間の独和辞典も同じ訳語を挙げているようだが、しかし「炭酸泉」とは、一般に気泡を含んだ「二酸化炭素泉」の別名であり、先述のマリーエンバート(現在のチュコ・マリアンスケ・ラズネ)やカールスバート(同じくチュコのカルロヴィ・ヴァリ)、あるいはシュヴァルツヴァルトの南端部にあるバート・クロツインゲンなどが、この種の

20 水垣渉「古代キリスト教における「好奇心」の問題」、『哲學研究』五四六号、京都哲学会、一九八二年、一四三頁所収、ならびに中世・近世ドイツへの作用については、吉田孝夫「好奇心と聖性——近世ドイツ奇譚集・予兆集の生成と展開をめぐって——」、奈良女子大学文学部『欧米言語文化研究』一号、二〇一三年、一二九—一六〇頁所収を参照。

泉質で有名である。²²

Sauerbrunnen とは、むしろ一八世紀のアーデルングの辞書の記述に従えば、「酸性がかった、酸っぱくて口のすばむような、饕餮の味」がして、「良質の緑礬 (Eisen-Vitriol)」が含まれた鉱泉を湧き出させている泉を意味する。²³ グリースバッハは、作者グリーンメルスハウゼンが村代官をしていたライン河畔・レンヒェンの町から東の森の中へ入った場所であり、鉄分を含む鉱水が、痛風などに対してよく効くという高い評判をもっていた。Sauerbrunnen は、したがって「炭酸泉」ではなく、「鉄鉱泉」とでも訳しておくべきだろうか。²⁴ グリーンメルスハウゼン自身も、そこへしばしば湯治に行ったようである。²⁵

季節は五月になった。ジンプリチシムスとヘルツブルーダーの二人は、グリースバッハの「鉄鉱泉」に到着する。その後次第にわかってきたのは、そもそも親友の症状が、都ウィーンにおいて彼を妬んだ者たちが彼に毒を盛ったことに起因するらしいことだった。さらにグリースバッハへの湯治行の勧めも、ヘルツブルーダーを軍の中枢から遠ざけようとする、同じ敵対者たちによる策略であつたらしい。ヘルツブルーダーは次第に衰弱し、やがて世を去る。

ジンプリチシムスは心底から哀しむ。しかし彼は、そもそも友人が病床にある時から、この湯治場で「喜び」(W467) を求めて遊びまわっていた。親友が死の境をさまよっている時も、その死後さえも、美しい女にあっさりとうつつを抜かして遊ぶ。そしてついには、「けだもののごとき欲情」(W473) のみを原動力として、バター売りの娘と結婚すること成功する。この時の主人公にとって湯治場は、ある種の樂園のように見えたようである。

この一帯はすばらしい。残酷きわまる戦争のあいだも、ほかの土地と比べて、こちらはずっと繁栄の花を咲かせている。その上おれにはカネがあつて、この土地で最上級の農家の屋敷を買うこともできる。あのまじめな百姓の娘と結婚して、ここのほかの農民たちと同じように、自分の土地を持って独立した暮らしを営むこともできるだろう。それに、この鉄鉱泉のそばよりも楽しく暮らせる住まいが見つかるはずがあるうか。ここならば、つねに入れ替わっ

てゆく旅の湯治客たちのおかげで、いわば六週間ごとに新しい世界を知ることができ、シーズンごとに世の中のモードがどんなふうに変わっていくのかを見物できる。(W473f.)

主人公には、しかし娘の表向きの顔しか見えていなかった。結婚した相手は、実は現世の欲望の権化のごとき女であり、放蕩を繰り返してジンプリチシムスの手を焼かせ、ついには酒の飲みすぎで死んでゆく。

とはいえ、ジンプリチシムスの言葉のとおり、さまざまな土地から湯治客が集まる温泉場は、多様性と変化に彩られた空間であったこと、そしてそこに一種のユートピア的環境が存在したことは確かである。

21 例えば第五卷第四章がそうである。ただし第五卷第六章では、文脈によって「湯治場」(望月)、「温泉場」(関口)と訳してもある。グリーンメルスハウゼン『阿呆物語 下』望月市恵訳、岩波文庫、一九八六年、二九、三七頁、グリーンメルスハウゼン『阿呆物語 下巻』関口存男生誕百周年記念著作集、翻訳・創作篇4、三修社、一九九四年、三五、四六頁。上村清延の抄訳版(一九五一年)では、第四章については「温泉」、第六章は「ザウエルブルン」と、地名のような扱いになっている。グリーンメルスハウゼン『阿呆物語——ジンプリチシムスの数奇な生涯——』上村清延訳、『世界文学全集 古典篇』第四卷、河出書房、一九五一年、二一九—三〇二頁所収、二八四、二八六頁。ちなみに識名「入浴観の違いから生じる誤解——E・T・A・ホフマン『黄金の壺』の「リンケ温泉」について——」、一〇七頁はヴェルテンベルクの温泉をめぐる一七二五年刊の著作において、この単語を「炭酸泉」と訳している。また Hebelmann, S.199 も一五七九年刊の温泉学的著作について、同じ理解を示している。

阿岸祐幸『温泉と健康』、岩波新書、二〇〇九年、八一—九四頁を参照。

22 23 24 25 Johann Christoph Adelung: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen. Reprint. Originally published: Leipzig 1793-1801. Hildesheim/New York 1970. Bd.3, Sp.1296.

なお、戦後すぐに著された三つの邦訳は、すべて「バロック・ジンプリチシムス」と呼ばれる一六七一年の増補改訂版に基づく翻訳と思われる。関口訳に出版の表記はないが、初版に存在しない一六七一年版からの文面が、望月訳同様に見える。また上村訳は当時のドイツで刊行されていた省略版数点を主として参照したようである。J・H・シュルテ校訂の初版が刊行されたのは一九三八年(「続篇」は別立てに翌年刊)のことであるが、一九世紀のロマン派の作家たちを始めとして、後世に大きな影響を与えたという意味から、改訂版を優先したのだらうか。つまり一六六八年初版の邦訳は、なおも存在しない。本論の考察は、現在のグリーンメルスハウゼン研究の定石に則り、作者以外の人物による加工が施されていないと考えられる一六六八年初版に基づいて行う。

Heiner Boehncke/ Hans Sarkowicz: Grimmelsausen. Leben und Schreiben. Vom Musketier zum Weitauner. Frankfurt am Main 2011. S.328. Vgl. auch Breuer, W947. なおグリーンメルスハウゼンには Sauterbrunnen の湯治客たちの対話文学の形式をとった作品がある。Vgl. Boehncke/ Sarkowicz, S.430.

まず後者について言えば、一六世紀から、「温泉」(Bad)はH・ザックスを代表格とするドイツ語圏の文学が好んで取り上げる主題となり、そして宗教改革期の論争的著作においては、教派と身分を異にする登場人物たちの架空の論争の舞台として「温泉」が多用された。この場所では、温泉場法規(Badordnung)の遵守によって和平が維持され、外部の世界ではおよそありえないような、階級と思想の違いを越えた交流が実現していたらしいのである。一五七八年、まさにこのスイスの湯治場バーデンを訪問して、当地の様子を記したH・パンタレオンの旅行記などは特に有名である。グリンメルスハウゼンには、Sauebrunnenの湯治客たちの対話文学の形式をとった別の作品があり、その表紙絵には、ユダヤ人を含む種々の社会層の集いと語らいを表現したユートピア的イメージが描かれている。²⁷ またH・ザックスからグリンメルスハウゼンへの深い影響は基本的な事柄であり、例えば続篇における「バルトアンデルス」が、この一六世紀の文学的先達に由来することは周知のとおりである。

また前者の点、すなわち湯治場客の多様性についても付言しておきたい。ここで小説の主人公が主眼的に述べているのは、世の新しい流行や出来事を伝えてくれる、湯治場の賓客としての上流階級の人びとのことではあるだろう。しかし温泉場には、これら上流階級と、それを迎える温泉場施設の人間だけがいいたのではなく、むしろ世のすべての階層の人間が、その懷具合、つまり財産の許す程度にに応じて寄り集まっていた。湯治場の医者を始めとして、金儲けのために群がる商人たちから、物乞いの賤民、そしてハンセン氏病の患者たちにはいたるまで、多種多様な人びとがそこには見られた。近世の温泉場は、貧富と身分差を一所において総覧できる、いわば世の縮図のごときトポスなのであった。²⁸ 一六世紀の諷刺文学が、温泉を舞台として盛んに書かれたことは、ゆえに至極自然である。²⁹

そうした世の縮図であり、人びとの交通、交流の結節点である場所でこそ、やがて主人公は自分の育ての父母と再会する。父は相変わらずの貧しい百姓の姿であり、その時は一頭の山羊を連れていた。それは「鉄鉱泉に当時に来ている伯爵夫人」を目当てにすることであり、まずは薬草を山羊の餌に与え、その乳を夫人に飲ませるのだという。温泉場の人間模様がありありと見える一節であるが、小説『ジンプリチシムス』が、この第八章でひとつの重要な局面を迎え

ることはよく知られている。すなわち主人公は、自らの出自が貴族であり、しかもあの森の隠者、シュテルンフェルス・フォン・フクスハイム大佐を実の父とすることを、まさにここで育ての父から明かされるのである。その舞台が、ユーロピア的な雰囲気を漂わせる湯治場の特殊な空間であったことには、どんな意味があるのか。

シュベッサルトの森で育てられ、その後、あちこちへと放浪を続けてきた主人公が、その放浪の人びとの集散地である湯治場に来て、自らの出自、根源を知る。これを、物語の流れの水平軸から垂直軸への変換と見なすことはできるだろうか。あるいは、表層世界におけるピカレスク小説的迷走・流浪から、深層世界への探究への転換とでも形容しようか。

小説『ジンプリチシムス』は、一六七一年版から付いた挿絵のすべてに、「妄念は欺く」(Der Wahn betrügt)のモットーが書きこまれている。³⁰ 真実の見えにくい現世の生活への警告である。また有名な表紙銅版画では、中央の謎めいた怪物の足もとに、たくさんの仮面が転がっている。つまりこの小説は、世の外観の多様さを示しつつ、その背後に隠された、何らかの別なる世界への意識化を行っていると思われる。

自らの出自を知るこの湯治場の場面の後に来るのは、ムンメル湖の水底へと導かれ、地底王国の王と会見するくだりである。個人としての出自を知ったジンプリチシムスは、続いて、自らが生きる空間そのものとしての地球について、その表層の下に存在するものを教えられるわけである。〈温泉〉トポスは、この二つのきわめて重要な出来事が生じる舞台としてある。それは表層の世界に突如として空いた、一点の深いブラックホールとも言えよう。〈温泉〉は、水平

26 Lolleit, S.284.

27 Vgl. Bochnack/Sarkowicz, S.430.

28 Lolleit, S.144. Vgl. auch Heßelmann, S.195-199, 206-208. この点、識名「入浴観の違いから生じる誤解——E・T・A・ホフマン『黄金の壺』の「リンケ温泉」について——」九七「一二頁の記述は、「庶民」にも開かれたという日本との対比的評価など、精確さを欠くと思われる。

29 Lolleit, S.348f.

30 Vgl. W.: Illustrationen der Ausgabe E5 1671.

的世界におけるこれまでのあらゆる出来事を想起させつつ、そこに集合させる中心点であり、続いてそこから物語の糸のベクトルを変え、地底世界の中心へと潜ってゆく入り口である。あたかも地の底から湧き出る温泉の水がたどってきた同じ道を通り、それを遡っていくかのように。

主人公はある日、温泉場にはびこる、浮ついた贅沢三昧の人間たちを避けて、このグリースバッハの鉄鉱泉を飲もうと屋外に出る。そこで遭遇したのは、あの軽薄な連中よりも「ずっと分別のある」類の人びとの集まりであり、「ムンメル湖」という、「ここから近くの、最も高い山々のひとつの山の中に」あるという、「深さの測り知れない」(W468)不思議な湖の話をしているところであった。彼らは「さまざまな百姓の古老たち」(W484)を連れてきて、この土地の伝説を語らせていた。例えば、石を湖に投げこむと、一帯はまたたく間に大嵐になるというような話を。³²

ジンプリチシムスの因縁深い「好奇心」(W48)が、ここで刺激されないわけがない。世俗世界の種々の領域をめぐり歩いてゆく、まさに原動力となってきた「好奇心」が、ただしここからベクトルを変えて、地表／水面の下へと主人公を駆りたててゆく。ジンプリチシムスは、育ての父と一緒に山を登ってゆき、湖のほとりで、さっそく大きな石を次々と投げ込んで、伝説の信憑性を試してみるのだった。すると確かに黒雲が空を覆い、雨と風が近づいてくる。そして湖の水面には、水界の精霊が突如として現われた。主人公は叫ぶ。

創造主の奇蹟のわざ (Wunderwerk) は、大地の胎の内側でも、水の底においても、なんと偉大なることだろう。
(W492)

詩編一〇四―二四に依拠したこの文句は、悪魔の幻術に対する魔除けの呪文として言ったものだと思えるらしいが、同時にこれは、文字どおり現世の不可思議さに感動し、神の礼賛 (Gottes Lob) を行ったものと読んでも間違いないのではないか。それによってこの言葉は、第一巻第七章に見える有名なバロック宗教詩「来たれ、夜のなぐさめよ」の内

容とも共鳴し、この小説全体を読み解く一つの枠組みを与えてくれることになる。つまりこの小説は、「好奇心」に促されて旅する主人公が、神の被造物としての現世のすばらしさを認識してゆく過程を描くものなのだ。

Wunderという近世のドイツ語は、「奇跡」としての宗教性と「不可思議」としての世俗性の両極に揺れる独特の語彙である。近世ヨーロッパには、プラハにおけるルドルフ二世のそれを一例として、多くの「奇跡の部屋」(Wunderkammer)が、すなわち世のさまざまな奇物珍品を蒐集した宝物庫が造り出されたが、小説『ジンプリチシムス』には、はたして要所ごとにこの語が登場して目を引く。³⁴ 現世の事物に対する近世的関心がここに暗示されている。それは「好奇心」へのアウグスティヌスの禁正を越え、近世ドイツ、すなわちルネサンスの息吹きを得たドイツで、独特の宗教的世界観を結晶させたA・キルヒヤーの精神に接近していることを示すものである。火山学・鉱物学・水文学の知を包括的に論じ、それを神秘的な図版のもとに示したキルヒヤーの奇書『地底世界』(Mundus subterraneus)は、一六六五年にローマで出版されたものだが、この人物に代表される、近世ヨーロッパにおけるイエズス会士の学術的貢献には特筆すべきものがある。そしてムンメル湖については、キルヒヤーの書に刺激され、この先達に献呈された、同じくイエズス会士のE・G・ロレトスによる著作(一六六七年)に、ムンメル湖をめぐる最古の描写がある。グリーンメルスハウゼンは、このロレトスの一六六六年の探索に同行したと推測する向きもあるようだが、これは小説『ジンプリチシムス』への直接的影響を云々するには刊行が遅すぎるだろう。またグリーンメルスハウゼンはラテン語に堪能だったわけではないので、

31 湖に向かう直前、主人公は木蔭の草地に寝そべり、過去の生涯のすべてを真摯に回顧してみせる。(W487f.)
 32 ここで語られる物語が、グリム兄弟によって『ドイツ伝説集』五九番「ムンメル湖」として採取される。またいわゆる「バロック・ジンプリチシムス」版では、ここに農民たちの物語の追加がなされ、本筋から離れた逸話を読む楽しみが増幅されている。Vgl. W774-776 (Text-erweiterungen).

33 Brauer, W960.

34 W78, 90, 259, 643 und 679. 「続篇」第二章(W679)では、この小説自体が「奇跡の部屋」のコレクションに入るべきだと言われる。五卷までの物語のまとまりに対して「続篇」は、グリーンメルスハウゼンの詩学をいわばメタレベルから説くものだという指摘がある。Vgl. Hubert Gersch: Geheimpoeik. Die "Continuatio des abenteuerlichen Simplicissimi", interpretiert als Grimmeischausens verschlüsselter Kommentar zu seinem Roman. Tübingen 1973.

キルヒャーとの直接的関係を認めることは難しい。そこで浮上してくるのは、一六六二年に刊行された、イエズス会士C・ショットの自然地誌学的著作である。バーデン・バーデンの人であるショットは、たびたび当地の神秘の湖を訪ね、自然科学的観察と好奇心をくすぐる奇譚の混ざり合った書物を作りあげた。³⁵ これはグリーンメルスハウゼンも共有する「好奇心」、まさに近世特有の著作物であった奇譚集の根幹にある創作精神から生まれたものである。³⁶

水界の精霊に導かれ、この後ジンプリチシムスは、湖の底の世界を訪問する。この精霊は、水の精たちの「王子」(Printz) (W494) であるらしいが、パラケルススの精霊論から影響を受けて創作されたと想像されるこの人物を相手に、主人公は、自然界の仕組みについて種々の教えを受ける。例えば水の精は、ムンメル湖のような特別な底なしの湖、後の章の表現で言えば「地球の中心まで底がなくずっと通じている」(W500) ような湖が存在している理由を、三つほど挙げている。いわく一つには、この湖によって「すべての海」(alle Meer) と「大海」(der grosse Oceanus) を地面に繋ぎとめるため。もう一つは、地上の全ての水は一つの深い「大海」の底から出ており、それを地上へと管を通すように導いて、「地表に潤いが」与えられるようにするため。そして――

三つ目には、われわれ、神の理にかなった創造物が、こうしてここに生き、われわれの仕事を果たすことによって、創造者である神を、その偉大なるいくつもの奇跡のわざ (Wunderwerken) において讃える (loben) ためである。そのためわれわれとこれらの湖は創られたのであり、最後の審判の日まで存在しつづけるであらう。(W495)

度重なる戦争と疫病に脅かされた一七世紀ドイツにおいて、深い終末観が広まっていたこと、そしてそれをこの小説が根本的に踏まえていることはすでに述べた。第五章で、ジンプリチウスはついに地底の王の謁見を受ける。王との会見のなかでジンプリチシムスは、世の終末が近いかどうかを尋ねられるのだが、何を思ったか、彼は地上において見事なユートピアの世界が実現していると語る。この一節は、現実の人間社会の悲惨に対する非常に辛辣な皮肉を醸し出

しているだろう。現実の醜悪さに対して、何もかもそれとは逆の、つまりさかさまの姿で表現してゆくこの一節は、民衆文化の儀礼や言語に特有の表現原理が、「社会を理解する一つの手段として」³⁷見事に活用した例と見なされる。またこのような民衆的表現性は、近世詩学における卑俗文体 (*genus humile*) を用いた低い次元の小説、すなわち近世的な意味での大衆向け小説としてふさわしい。

この諷刺的一節を挟んで、第四章と第一六章では、水の精の王子が、主人公のさらなる好奇心の問いに対して答えを返している。その問いとは、この地上にはなぜ種類の異なる水が存在するのか、というものであった。これまでの地底での学習に基づけば、世界の全ての水は一つの「大海」に由来しているはずである。ところが地上には、匂いも風味も効能も、それぞれに異なる水が存在している。ある水は「鉄鉱泉」となって「健康」に役立つのに対して、ある水は「有害」で「死の危険」がある。またある水は「ぬるい」のに対し、ある水は「ぼこぼこ沸き立って」おり、またある水は「氷のように冷たい」。(W501) これはなぜなのだろうか――。

水の精の説明によれば、それは地層に存在する種々の金属の間を浸透して昇ってくるためだという。水の精はここで、「大地の胎」(W502) に内蔵された、金・銀・銅に始まる膨大な金属と塩・硫黄類の名称を列挙する。そしてそれら各種の金属類から水の内部へと効能が移り入るためには、「何百年、何千年」(W513) もの時間の経過が必要である、と強調的に述べている。地上ではすべてが変わりやすく、「うつろいやすさ」(*Unbeständigkeit*) (W607, 637) に支配されているのに対して、地底には別の時間が流れている。罪と殺戮、種々の病気という〈病〉を抱えた現世に対して、それを治癒すべき「健康の泉」(W512)、「癒しの泉」(W513) を生み出すためには、途轍もなく長い時間が必要であるという。

37 36 35
Dieter Martin: *Grimmelshausen und der Mummelsee. Marbach am Neckar 2010. S.5-8.*
吉田孝夫「上掲論文(註20)を参照。

デイヴィッド・カンズル「さかさま世界——ヨーロッパにおける瓦版の一類型とその図像学——」、バーバラ・A・バブコック編『さかさまの世界——芸術と社会における象徴的逆転——』岩崎宗治ほか訳、岩波書店、一九八四年、八九頁。

現世の表層を慌ただしく生きるばかりでは、およそ気づくことができない事柄を、主人公は、この地底・水底の旅で認識する。そもそも湖名の「ムンメル」とは、ドイツ語に言う「仮装舞踏会 (Maskerade)、変装したもの (ein verkapptes Wesen)」と同じ種類の言葉であること、つまり動詞「隠す」(mummeln) に由来する、「隠しの湖」とも呼ぶべき名前であることを、主人公はすでに十一章において、つまり地元農民たちの話によって探検への「好奇心」を強く動かされた段階で、認知り顔に述べている。

時おり見せるこの悟ったような言辞が、いわゆる教養小説の主人公における〈成長〉ストーリーのごとくに個性と能力の獲得とならず、つねに後退と堂々めぐりの危険を漂わせつづける。それは確かにピカレスク小説の登場人物らしいところではある。いずれにしても、主人公ジンプリチシムスは、このムンメル湖の名称の俗流語源解釈 (Volksetymologie) によって、小説の重要な視点を明らかにしている。つまり地底探検によって彼は、水平的彷徨から垂直的沈潜への認識を開き、世の根源と未来への意識化がここから可能になったのである。まやかに満ちた世界では、隠されたものの裏へ、下方へと行くことでこそ、見えてくる何かがある。

第一章の結びの一段落は、安らかにして美しい。地上で「源泉」と呼ばれるもの、つまり温泉の源のさらなる源泉に、今ジンプリチシムスは来ている。ムンメル湖の湖底への旅は、〈温泉〉の源への旅なのであった。地球の中心、つまり地の奥底深くにある王の宮殿にあって、ジンプリチシムスは、この太陽から最も離れているはずの場所にも、やさしく光が射しこむのを見る。この地底は、地上に潤いと健康をもたらす力の究極の源である。それは神のおわす天上ではないとすれば、地上から最も離れた場所においてこそ培われるものである。神のみに可能な自然の巧み、不可思議／奇蹟によってこそ。

地上に向かって管のように通じている湖たちを、彼は地の底から見上げている。太陽の光が、図像伝統的にもキリスト教の神の力の比喩であることは疑いない。湖はまるで「屋根の明かりとりか窓のよう」であり、そこから「光と温もりが」地底に届いてくるのだった。そして――

いくつかの湖が斜めにねじれて通っているために、それが叶わない時には、自然は反射のはたらきを代わりに用いた。自然は地底のあちこちの片すみに、水晶、ダイヤモンド、紅玉の巨大な岩石を秩序正しく置いていたので、澄んだ明かりはそこに当たりつつ、遥か下まで届けられた。(WS14f.)

四 経済と靈泉

造化の神秘と創造主への讃嘆の念に満たされたかのような、この第一章結びの自然観照は、いったい何だったのだろうか。この後、小説における〈温泉〉表象は、もとの世俗的な関心にあっさりと舞い戻ってしまう。地底の王は、地上に戻るジンプリチシムスに向かって、何か手土産を与えようと言うのだが、それに対して彼が求めたのは、「真正の医療用の鉄鉱泉」(WS15)であった。自らの屋敷にその泉があれば、「大量の裕福な湯治客たち」(WS16)を集めて大儲けができる。一八世紀初頭に描かれた「経済人」(ホモ・エコニクス)³⁸としてのロビンソン・クルーソーよりは、少しばかり時代を遡ることになるが、ただし両者ともに物語の舞台は一七世紀であり、まさにジンプリチシムスもまた初期資本主義時代の権化と呼ぶべき人間である。そうか、それしきのものでよいのなら、と言って王が渡したのは、地上に出てから地面に置くなり、すぐこの地の中心に戻るべく土を掘って潜ってゆくという不思議な石であった。

ジンプリチシムスは、自らが経営する湯治場施設について、事細かに想像を膨らませて悦に入る。(WS16f.)しかし地上に戻ったのはよいが、シュヴァルツヴァルトの密林で道がわからずさまよい歩く。これはつまり水平軸の物語に戻る

38 大塚久雄『社会科学の方法——ヴェーバーとマルクス——』、岩波新書、一九六六年、一〇一頁(Ⅱ「経済人ロビンソン・クルーソー」の章を参照)。M・ヴェーバーに依りつつ、大塚はロビンソンにイギリス中産階級の日常道徳と経済観念が体现されていることを指摘する。なお弓削尚子『啓蒙の世紀と文明観』、世界史リブレット八八、山川出版社、二〇〇四年、四三頁では、植民地・異民族に対するロビンソンの搾取的態度、西欧中心主義が指摘される。前者の大塚によれば、ロビンソンは「プランテーション」的植民地経済から「エンクロージャー」に基づく近代資本主義へと姿勢を変化させていくのであるが、弓削の見方では、孤島でのフライデイとの生活もまた「コンクリアルな価値観」に導かれているという。ともかくも大塚、弓削の両者が指摘するように、こうしたロビンソンの志向性を揶揄し、相対化するのかがリヴァー／スウィフトである。また実のところロビンソンにも、スペインに代表されるヨーロッパのアメ리카大陸侵略への批判的眼差しは存在していると思われる。しかしリヴァーとの対照性を強調する弓削に、そのことへの言及はない。

て、ふたたび迷走のモードを繰りかえすという構造になっている、やがてジンプリチシムスは真夜中に、山仕事を
山民の男たちに出会った。山民たちはジンプリチシムスを怪しむが、ともかくも追いはらわずに焚き火のそばに
寝かせてやる。そこでジンプリチシムスは、体を横たえた拍子に、あの大切な石を、うっかり地面に触れさせてしま
うのだった。温泉はそこから湧き出てきた。

自分の屋敷であるどころか、町から遠く離れた奥深い山中から泉が出てしまい、ジンプリチシムスは、当初の計画が
崩れたことに心底から憤る。それでも気を取り直して、彼が試みたのは、この山民たちを、カネの儲かる温泉リゾート
建設に誘ってみることであった。そしてまずは鉱泉を自分で飲み、そして山民たちにも勧めてみるのだが、彼らの反応
は意外なものだった。

「だめだ、だめだ」連中は言った。「だめと言ったらだめだ。領主どのが管理人をここに置いて、そいつが一人で
大金持ちになるだけのことさ。おれたちはそいつの道化になって、下働きで好きに使いまわされ、そいつのために、
きちんとした山道のつくりをさせられるだけさ。そして何一つその礼を受けとれることはねえ。」(W521f.)

巨大な経済的利益は、そこに豊かに与れる者と、そこからそもそも排除される者との格差によって生じるものであり、
主人公が思い描いた温泉リゾート開発の計画は、そうした金銭の力学を浮かび上がらせる。ジンプリチシムスは執念深
く、後でもう一度説得を試みるが、「あんたと鉄鉱泉と、まとめて悪魔にさらわれるがいいさ」(W522)というのが彼
らの答えであった。山の百姓は頑固であるが、しかし領主との権力関係については冷静な目をもっている。

その後、帰宅したジンプリチシムスは、しばらく家に閉じこもり、書物に埋もれて暮らす³⁹。読書と思索の日々のなか
で、「最上の学芸」(W524)である神学の書を読みながら、ジンプリチシムスの思いが向かったのは、先述のハンガリー
再洗礼派のユートピア的共同体のことであった。不摂生をせず、秩序ある生活をしている彼らは、「めったに病気にな

ることがない」(W525)という。作品を一貫する〈病〉のテーマが、ここにもさりげなく現われている。

第五巻の全三十四章は、これであと四つの章を残すばかりとなった。初版の形で言えば、それは小説そのものの結末でもある。この後、主人公はスウェーデン軍の大佐に「執事」(W529)として雇われ、そしていくつかの詐欺に遭いながら、遙か東へと移動することになる。モスクワとアストラハンへ、さらには極東の日本まで旅をする。そしてマカオから東インド諸島を経て、アレクサンドリア、コンスタンチノープル、ローマ、シスをたどる長い遍歴をする。最後にはドイツのシュヴァルツヴァルト、つまり育ての父のいる町に戻ってくることになるが、とりわけアストラハンからの長大な旅の行程は、第二三章の中に圧縮して述べられている。続く短い第三章は、主人公による生涯の回顧と感慨である。長めである最終第二四章は、よく知られているように、その大半がA・デ・ゲヴァラの著書からの数頁にわたる引用から成る。スペイン・カール五世の宮廷説教師ゲヴァラによる『宮廷生活の蔑視と田園生活の礼讃』は、バイエルン公国の宮廷文書官であり、イエズス会士として対抗宗教改革の指導的役割を担ったÄ・アルベルティヌスによる独訳版(一六〇四年)⁴⁰によってドイツ語圏に浸透した。グリーンメルスハウゼンはこれを手もとに置きながら、そこからいささか自由な、つまり厳密には語句が同一でない引用を行っているが、人生の半ばにカトリックへ改宗したグリーンメルスハウゼンの読書の一端を示すものではある。

「好奇心」に駆り立てられつつ俗世と地底を放浪してきた主人公が、この小説の結びにおいて究極的に到達する認識は、以下の二つのことであった。すなわち一つには、「汝自身を知れ」(Nosce te ipsum) (W543)ということ、そして

39 主人公は突如として活動性を失い、悲哀にうち沈んだり、沈思黙考に耽ったりする。フィチー的なルネサンス・メランコリー気質論に基づいてこうした主人公の性格を論じることが、すでに研究の定石である。金銭的利益への執着などもこの気質論から説明される。Vgl.

Breuer, W833, 860, 895, 958, 972 u.a.m.

40 Breuer, S.882. アルベルティヌスは、数点のスペイン・ピカレスク小説のドイツへの輸入者としても知られ、グリーンメルスハウゼンへの影響はきわめて大きい。アルベルティヌスの独訳版ピカレスク小説は、現世批判と回心の理想化において、キリスト教・イエズス会の宗教的教訓性を濃厚にもつ点が特徴的であり、後続のドイツ版ピカレスク小説の原型となる。ヴィルヘルム・エムリッヒ『アレゴリーとしての文学 パロック期のドイツ』道旗泰三訳、平凡社、一九九三年、四五二頁以下を参照。

もう一つは、「自分の人生は生などではなく、死であった」ということである。(W543)「やらば、俗世よ」(W544ff.)というゲヴァラの言葉が各段落の冒頭に置かれ、反復、強調される。

小説『ジンプリチシムス』を初版の全五巻の形で見た場合、このゲヴァラの著作からの長い引用が作品全体の結びとなる。ただし語り手は、この引用の後に、少しばかり自身の感慨を付け加えている。それはまたもや、直前まで述べていたことをあっさり忘却したかのような、一貫性を欠く不可解な発言である。語り手は言う。ゲヴァラの言葉をかみしめた自分は、世俗との縁を断って「隠者」になろうと思ったと。

そしてわたしは、ミュッケンロッホにある自分の鉄鉱泉のそばに住みたいと思った。それはわたしにとって心地よい無人の土地であったからなのだが、しかし近隣の農民たちは、それを許そうとしなかった。この人びとにとって、わたしは鉄鉱泉の場所を世に漏らし、そして戦争がようやく終わった今、鉄鉱泉までのきちんとした山道を作るようにと、領主たちを動かすのではないか、そう思われて心配でならなかったのだ。こうしてわたしは、別の無人の土地におもむき、シュペッサルトのころと同じ森の生活をふたたび始めた。とはいえわたしが、亡き父と同じように命の終わる時まで、この場所にとどまりつづけるかどうか、それはまた別の話である。(W551)

最後の一文で、神の「慈悲」を願いつつこの段落は結ばれるが、森の隠者として清貧の生活を送るという決意は、非常に曖昧なままで小説は終わる。そもそも隠者になるというこの時に、なぜわざわざ「鉄鉱泉」の場所にいたいと思ったのか。自らの健康と長生のためか。あるいはまさか、後で商売に打って出ようとでも考えたからか。「心地よい無人の土地」(eine angenehme Wildnis) という言い方にはすでに、世俗的快樂への後戻りを許しかねない甘い響きが隠れているように思われる。

大団円の解決と帰着を拒否し、むしろ機転と悪知恵による危機の回避を、そして絶えざる放浪の旅を描こうとするピ

カレस्क小説の特徴が顕著であるとは言えよう。雑多なエピソードを自由に積み重ね、「終りを拒否する」⁴¹この種の小説は、果たして翌年に「続篇」を生み出し、さらにいわゆる「ジンプリチムス著作群」として、合計十点に達するシリーズものへと肥大していくことになる。本論は、この『ジンプリチムス』の表題に包摂される「続篇」までを考察の対象として、〈温泉〉表象の展開を叙述してみることにしよう。

「続篇」は、果たせるかな、第一章で早々に隠者生活の中断を告げる。「望遠鏡」と、そして聴覚の増幅器なるものを用いることで、ライン川対岸の山上からストラスブルの都市生活を味わい、ふたたび好奇心の虜となった主人公は、修行生活から身を引くことにする。(W565)「巡礼者」(W607)として旅に出ると述べ、森で孤独に生きるのではなく、「隣人のために奉仕」(W607)することが目的であると本人は語るが、その宗教的な意図はどこまでが真実なのだろうか。巡礼地アインジードルンをふたび訪問しようとする旅の途上では、「好奇心あふれる」宿の主人を楽しませるために、「世界の七不思議」(W633)に代表されるさまざまな珍しい風物を語って聞かせる。それは一つには「片方の目に二つの目玉をもち、もう片方の目に一頭の馬の像をもつ」(W629)人間といったような、世界各地に生きる不思議な姿や不思議な風習をもつ生き物の話であるが、これに続いて列挙されるのは、世界の不思議な泉と鉱泉、そして世界の不思議な河川の名である。第十四章における、このひたすらな列挙の語りの長さは、注目に値するものである。(W631-633)

続篇の〈温泉〉表象は、現世の風物へのルネサンス的好奇心を伝えるこの第十四章と、そしてこれに続く第一五・一六章とにある。

41 バーバラ・A・バブコック「自由は娼婦だ——逆転、周辺、ピカレスク小説——」、同編『やかやまの世界』一三六頁。Vgl. auch Volker Meit: Nachwort. In: Grimmeleichen: Der abenteuerliche Simplicissimus. Stuttgart 2012, S.785-819. Hier S.807f.

42 この列挙の内容には、第五卷「四章と重複する部分が少なからずある。W・カイザー、R・アレヴィン、E・エルマティンガー古い大家たちの研究では、この重なりは、刊行を急いだ作者の不注意、過失に由来すると見なされ、また河川・湖沼名の冗長な羅列には、無味乾燥な学識への諷刺的意図があるものと考えられていた。Vgl. Gersch, S.20 und 27.

後者において〈温泉〉は、あたかも中世宗教説話の名残りのように、霊的なものを呼び寄せる舞台となっている。旅を続ける主人公は、ここでサヴォイの領内に入ってきた。激しい雨に降られ、ずぶ濡れになりながら歩く巡礼者を、ある貴族が家に招き入れてくれる。その家の主人は、なぜかジンプリチシムスの名前を知っているのだが、ともかくも彼が部屋で就寝する段になって彼は、ここには幽霊が出ると言い残し、そして外側から鍵をかける。

ジンプリチシムスはここで、かつてグリースバッハの鉄鉱泉で、親友ヘルツブルーダーが亡くなったところの出来事を思い出すのだった。とある会話の場で、スイス人貴族である二人の湯治客が、自分の家には幽霊が出ると言ったのを受けて、そんなものに怯えるのは愚か者だと、彼らに向かって言い放っていたのである。するとそのスイス人たちは、夜中、白い服を着てジンプリチシムスの部屋に忍び込み、彼を震え上がらせようとした。しかし彼は、鞭を取って反撃し、二人をこてんぱんに打ちのめしていた——。この顛末は、実は当の第五巻には記されておらず、この「続篇」における追加的な筋書きなのであるが、ともかくもこの夜は、そのスイス人たちにとって、いわば絶好の復讐のチャンスとなったのである。ジンプリチシムスは、幽霊が出るといふ部屋に寝かされ、不安なまま深夜を迎える。

ジンプリチシムスが寝たふりをしているとこへ、四人の男の幽霊が近づいてくる。四人に髭を剃られるか、そうでなければ、一つの頼みごとを聞いてもらいたいと、そのうちの一人の老人が言い出した。いわく自分はこの家の当主の曾祖父であり、かつてこの三人と共謀して悪事をはたらき、村人から多くの金銭をせしめた。この「もめごと」(Schereit)の罰として、死後も自分は幽霊としてこの世にとどまらされ、「髭を剃る」(scheren)仕事を続けているのだが、もしあなたが、隠したお金の在り処を曾孫に伝えて、わたしの罪滅ぼしに手助けをしてくれるとありがたい。そうすれば自分たちは幽霊の身から解放される——。

以上、この箇所で開催する出来事は、民話学の領域では「幽霊の床屋」と呼ばれる物語タイプに属する。その初出がグリーンメルスハウゼンの小説のこの一節にあるわけである。⁴³ 床屋(BaderなごしBartier)の職業は、そのドイツ語名称が示すように、浴場(Bad)と深い関わりをもち、同じ施設内で仕事がなされることも多かった。浴場主と共に、いわ

ゆる「賤民」(unehrliche Leute)に属していたが、この社会の末端に置かれた非市民層の幽霊によって、勇気を誇示する人間の肝試しがなされる。

類似音の言語遊戯に基づく物語の構成は民話に特徴的なものであるが、こうして主人公は、幽霊の出没と金銭の問題を解決するのだった。家の主人は、ジンプリチシムスに心から感謝し、グリースバッハの湯治場での仕返しをしようと思ったことを謝罪した。ちなみに、かつてこの主人の父の時代には、三十代の若い「放浪者」が幽霊退治をしようと行って意気揚々と部屋に宿泊したことがあり、しかし髭を剃りつつ苛まれる恐ろしい目に遭って、翌朝には髭も髪の毛すべて「まっ白に」(W646)なっていたという。

「続篇」第一五・一六章におけるこうした民話的段落は、〈温泉〉と霊的世界との観念的な近さを間接的に伝えるものである。それは第五巻の第二章と第六章において、より直接的に現われていたものであるが、というのもこれらの場面では、温泉場と巡礼地を舞台にしながら、共に「悪魔祓い」が行われていた。

第二章の「悪魔祓い」は、無論スイスの湯治場バーデンそのものではなく、そこに至る直前の巡礼地での出来事である。しかし物語上のこの近接性を念頭に置いて第六章を読むとき、この〈温泉〉と霊的遭遇との組み合わせを反復していることは、読み手の目を引かずにいない。たしかにこの二つの場面では、どちらかと言えば温泉場の世俗性と享楽性を前面に出してはいるが、しかしこうした霊的世界との接触のくだりを隣り合わせることによって語り手は、中世の宗教説話に見られたような霊的次元との接点を、かろうじて維持しようとしているかに見える。ちなみに第六章では、「身分の高い、金持ちのスイス人」(W468)である湯治客が、大金と高価な装飾品を何者かに盗まれ、泥棒探しのために近隣のガイスハウトから「悪魔祓い師」(Teufelsbann)を呼び寄せている。語り手によって「黒魔術師」(Schwarzkünstler)とも称されるこの男は、巡礼地の教会制度に身を置いた第二章の「祓魔師」(Exorcist) (W451)とは異なり、民間の

43

Rosa Schöner: Artikel "Bader". In: HdA1(1927), Sp.851-852. Hier Sp.851. Vgl. auch Breuer, S.1032. 多くの類話を示す有益な資料として Johannes Bolte/Georg Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm, Bd.1, Hildesheim 1963, S.24f.

魔術師に属する。二つの温泉、すなわち世に名を知られた巡礼地アインジールと、他方ドイツの片田舎の温泉地とに、それぞれ異なる社会層に属する二種類の霊術師が登場することは興味深い⁴⁴。まるで〈温泉〉と霊とはセットであるかのように。しかも巡礼地においてジンプリチシムスに直接語りかけた悪魔は、その人間としての罪深さと有限性を、あまりにも正しく、神のごとくに見抜いていたと思われる。

五 ムンメル

小説『ジンプリチシムス』における〈温泉〉表象の意味するものを順にたどってきた。近世ドイツの〈温泉〉が、聖俗の両面から立体的に描かれ、その社会でどのような位置価値を担っていたのが、この文学作品から知られる。

〈温泉〉はまた逆に、小説そのものに一つの大きな理解の枠組みを与えてくれるように思われる。「続篇」は、やがて再度の世界旅行に、正確には紅海方面への旅行のくだりに入り、続いてアフリカ大陸の東の海における、ロビンソンの南国の孤島の生活が描かれる。外界から隔てられた島のイメージが、ユートピア論の性格をもっていることは明らかであろう。そしてこの島にオランダの商船が流れ着くことで、主人公ジンプリチシムスの手記が、その船長によってヨーロッパに伝えられる、という結びの形である。ところでこの島は、オランダ人船長が特徴づけるところによると、

ちなみにわたしはこの島を、世界でいちばん健康な場所だと思う。というのも、うちの病気だった船員たちはみな、五日かそこらのうちにすっかりまた元気になったのだから。そしてあのドイツ人も、この島に住んでいるあいだずっと、まったく病気知らずだったらしいのだから。(W698)

「あのドイツ人」とは、もちろんジンプリチシムスのことである。つまりこの小説は、〈病〉への意識化と、〈病〉の除去とにおいて終わる。冒頭の「病」の言及に始まり、その後の長い物語のなかで世のさまざまな〈病〉を描き出した

後、第五巻と「続篇」において〈温泉〉の表象を積み重ねる。そして全体の結びに、〈病〉の治癒ないし〈病〉の不在という到達点を示すのである。最終章においては、主人公自身が一人の「医師」(W694)だと呼ばれている。このような男の生涯を描いた小説は、それ自身を世直しのための医師、あるいは一種の医薬として見なすこともできるだろう。文を読むことはすなわち薬であったという、近世における医と文学との伝統的な結合関係を典型的に示すものである。⁴⁵そして〈温泉〉は、世と人間の湯治場、治療のトポスとして置かれていると思われる。「続篇」の結びにおける〈病〉の除去は、それが人間社会と隔絶された絶海の孤島であるという条件において、実現可能性とは一線を画した一つのユーピア的幻想のようである。南海の暖かな環境は、民衆的ユーピア像である「のらくら者の王国」の重要な構成要素、すなわち「若返りの泉」(Jungbrunnen)のイメージに通じるかもしれない。⁴⁶『ジンプリチシムス』は、〈温泉〉によって〈病〉と〈死〉を除去すべく夢見る小説なのである。

近世ドイツは、ラテン語からの独訳もしくはドイツ語による温泉効能書 (Baderschrift/ Balneologische Schriften) の冊子を数多く生産した時代である。その多くは大学出の医師によって書かれ、四体液説に基づいた各種の泉質の効能を述べることによって、温泉場の宣伝に寄与した。例えばエルツゲビルゲの温泉ヴァルム・バートのために、C・フォン・シュヴェンクフルトが著した著作(一六〇七年)は有名なものの一つである。⁴⁷ここにはエルツゲビルゲの山国における風土や薬草、鉱物が言及され、その関わりから土着の山の妖怪リューベツァールの伝承を伝える資料としても今日に名を知られている。グリーンメルスハウゼンが、この種の温泉学的文献をどの程度作品に反映させたのか、その全体像は未だわかっていないようだが、少なくとも小説『ジンプリチシムス』の第五巻一七章において、湖底から地上に戻った

44 第五巻には一か所の温泉が近接して登場する。望月訳には、ドイツに移って後の温泉について「スイス」の表記があるが、おそらく混同かと思われる。岩波文庫『阿呆物語 下』四一頁

45 Vgl. Gersch, S.67 und 85. Simplicius とこう名前が、近世において特定の薬草の固有名詞であり、Simplicien とは薬草採りの人間を意味した。⁴⁸ Vgl. Gersch, S.74 und Breuer, W823.

46 Boehneke/Sarkowicz, S.251. Vgl. auch Loliet, S.189. グリーンメルスハウゼンが深い影響下にあった H・ザックスに用例がある。⁴⁹ Vgl. Loliet, S.139f.

主人公が湯治場を大繁盛させる夢を思い描く場面では、「わたしの鉱泉とそのすばらしき泉質をめぐる優れた論考」を「医師先生方」に依頼して書かせ、そこには自分の屋敷を描いた「美しい銅版画」も載せようと意気こんでいる。(WS16f.) またムンメル湖における水文学的叙述を展開するにあたっては、ストラスブルの医師ヨハン・キュファーによる『辺境伯領の温泉を論ず』(一六二五年)に多く依拠したことが判明している。⁴⁹ キュファーの書には、地球の中心部に関する種々の地理学的著作が併せて紹介されているという。ちなみにこのキュファーとは、グリーンメルスハウゼンが一六六二年から一六六五年まで仕えた、同じくストラスブル在住の医師ヨハネス・キュファーの父である。グリーンメルスハウゼンはウレンブルク城の城守 (Burgvogt) として管理の全般を司っていたが、その間に主人の父の著作を開く機会を得たことになる。

「主は大地から葉を作られた。分別ある人は葉を軽んじたりはしない。」——シラ書三八—四にあるこの章句は、一六世紀の医学的言説にしばしば登場し、これを権威づけたという。スコラ哲学に基づく旧来の医学に対して、経験的な知に基づく新しい医学が台頭してゆく近世は、例えばパラケルススのような独特なる霊的医学を生み出した。そして医学の一分野としての温泉学においても、というよりまさにこの領野においてこそ、このシラ書の章句は精彩を放つのである。なぜなら鉱泉は、まさに「大地」の内部から作られた「葉」であるのだから。先述のシウヴェンクフルトも、序文にこの章句を掲げている。⁵²

大地の深淵にも漏れなくはたらくこの神的な力を、〈温泉〉のトボスは、ムンメル湖の場面において強く意識化していたように思われる。表層的世界をただひたすら好奇心のままに迷走することからの、根本的な視点の転換がそこでは意図されていた。人間は、それほどよく物を見ているわけではない。人の目は「妄想」に曇らされており、何より「妄想は人をあざむく」のである。見えているものの背後に「隠されている」——*munnen* されている——領域への意識が、それゆえにこそ求められる。〈温泉〉トボスが要求するこの意識は、実は小説の筋書きの核心に置かれた設定、すなわちジンプリチシムスが実は貴族の家柄の出自であったという設定にも深く関与しているように思われる。なぜなら

その血統の事実も、同じく人びとの目から長く隠蔽されていたのであるから。D・ブローイアーの指摘によれば、ムンメル湖の深みの探求と、主人公ジンプリチシムスのたどる人生の探究のあいだには、「アナロジー」の構造が据えつけられているという。一種の貴種流離譚とも言える『ジンプリチシムス』が、それではこの隠された高貴なる血統の事実——ある意味でそれは実によりふれた、陳腐な設定なのだが——によって何を言おうとしているのか。このことについてはまた稿を代えて考えてみたいと思う。

* 本研究はJSPS科研費25370357「近世ドイツ奇譚集の説話学・民衆文化論的研究」(基盤研究C、平成二五―二八年度、研究代表者：吉田孝夫)の助成を受けたものです。

- 48 Breuer, W944.
 49 Boelmeke/Sarkowicz, S.351f.
 50 Breuer, W970.
 51 聖書の邦訳は新共同訳による。
 52 Lohr, S.138f.
 53 Breuer, W958.